

## アクセント型の許容からみる伊吹島アクセントの3式

—伊吹島と観音寺の中学生の比較—

佐藤 栄 作

【キーワード】 伊吹島アクセント 音声アンケート式アクセント調査  
平進式 下降式 讃岐式アクセント

### 0

香川県観音寺市の伊吹島のアクセントが、アクセントの類の統合という点からみて、第一次アクセント（2拍体言の5類を5つのアクセント型で区別するアクセント）であることは広く知られている。また、伊吹島アクセントの特色が、単にアクセント型の豊富さにあるのではなく、京阪式アクセントや讃岐式アクセントが「式」を2つ有するのに対して、「式」を3つ有するという点にあることも明らかにされている（伊吹島式アクセント）。

「式」が3つ存在するとは、急激な下降に至るまでの音調に3種類あるということである。具体的には、高く始まって自然下降にさえ抗いながら高さを保つ「平進式」と、高く始まるが始まりの高さを保つことのない「下降式」と、低く始まって急激な下降の前に（無ければ末尾が）高くなる「上昇式」とであると筆者はとらえている<sup>※1</sup>。

伊吹島アクセント以外の多くのアクセントにおいては、「高い平ら」は「自然下降に従う」ため、若干の下降を伴う。そのため、伊吹島方言話者以外の者にとって、伊吹島アクセントの「平進式」はまさに「高い平ら」調であるため、一方「下降式」も「自然下降」と変わらぬ程度の下降であるため、どちらも「高い平ら」調に聴こえ、両者の区別が困難に感じられることが予想できる。また、「平進式」が「自然下降」に抵抗しているため、「上昇」調のように聴かれることもあるだろう。さらに、高く始まるといっても、物理的なピッチが「高」に達するには若干の時間が必要であるから、「耳のよい」観察者には、句頭に位置する「平進式」の語の音調は、「低高・・・」のように聴かれるかもしれない。このように、観察者が、自らのアクセントに引きつけてとらえる限り（実は、そこから逃れ難いのが常なのであるが）、伊吹島アクセントにも3式は存在しないのではないかと結論づけてしまったり、極めて不安定なアクセント体系であると感じてしまったりすることがありうる。それは、「耳のよさ」で解消できるものではなく、大量の談話資料を集めれば解決されるというものでもない。なぜなら、あらゆるピッチ変動

に大してまんべんなく敏感であることは、音声分析器に近づくことであって、音韻的解釈（アクセントのシステムをつかまえること）は別に行なう必要があるということに変わりはないからである。また、大量の実現形を俎上に載せても、依然として、「高」部分と、「低」部分に腑分けするという作業を行なうのでは、この地域のアクセントはとらえられないからである。

このことは逆に、「耳のよさ」に欠けていても、コツさえつかめば聞き分けることができるということでもある。例えば3拍の場合なら、始まりの高さよりも、2拍目から3拍目のピッチ変化の違いに注意する等々。しかし、それならば、コツをつかまえられる者にとって伊吹島アクセントは、永遠に捉えられないのだろうか。

## 1

筆者は、佐藤 1995, 1996 において、香川県西部の「下降式」の性質と、「下降式」「非下降式」のほりあい関係を、「高」「低」でしかアクセントをとらえられない人々にも分かってもらうために、音声アンケート式アクセント調査という方法を用い、その結果を報告した。「聴こえないものを聴く（とらえる）」、伊吹島アクセントについても基本的に事情は同じである。「聴こえないものを聴く（とらえる）」ためには、聴こえない人（調査者）の耳を介さずに伊吹島アクセントの3式の存在を提示するしかない。ここでも、音声アンケート式アクセント調査が有効ではないかと考えるのである。

本稿では、佐藤 1995, 1996 で用いたものと同一の音声を用いて、観音寺市立伊吹中学校（伊吹島唯一の中学校）と観音寺市立観音寺中学校（観音寺港を校区とする市街地の中学校、伊吹中学校から距離的に最も近い中学である）の生徒を調査した結果を報告する。中学生において、3式の存在が確認できれば、それより上の世代においても3式が存在することを証明したことになるだろうという、いささか賭けに近い調査であった。以下、今回の調査結果と調査・分析するなかで気づいたいくつかの事象について報告する。

伊吹中学調査は2001年10月1日に、観音寺中学調査は、10月16日に実施した。被調査者は、伊吹中学校の2、3年生35名全員（2年生18名、3年生17名）と、観音寺中学の2年2組の生徒28名である。

調査方法については佐藤 1996 に述べたとおりであるが、あらためて簡単にまとめておく。

この調査は、あらかじめ用意した音声をインフォーマントに聞いてもらい、反応をみるものである。今回の調査では、3式それぞれの無核語の代表として、「鰻（ウナギ）」（上昇式無核）、「桜（サクラ）」（平進式無核）、「鏡（カガミ）」（下降式無核）の3語<sup>※2</sup>を下に挙げる9通りの音調型で佐藤自身が読んだものを提示し、インフォーマント自身の当該語のアクセントに合致すると認めてよいものには

「○」を、そうではないものには「×」を記入してもらった<sup>\*3</sup>。提示した音調を「高」=H, 「低」=L, 「中」=Mで表すなら、次の通りとなる。

a	HHH	d	HLL	g	LHL
b	HHL	e	LLH	h	LHH
c	HHM	f	LLL	i	LHM

すなわち、「鰻」を例にとるなら、「a」としてHHHの「ウナギ」を3回、「b」としてHHLの「ウナギ」を3回、「c」としてHHMの「ウナギ」を3回、というように録音したものを聞いてもらい、○×判定をしてもらった。提示音調は合成音声でないため、3回の発話に若干の揺れが存在しており、それが回答に影響していないとはいえない。そうした問題点をいったんおいて、理想的にこの調査が実施できれば、次のような結果が得られるはずである。

伊吹島方言話者ならば、「鰻」は上昇式無核（遅上がり）であるから「e」（LLH）が、「桜」は平進式無核だから「a」（HHH）と「f」（LLL）が、「鏡」は下降式無核だから「c」（HHM）が、自らのアクセントにはほぼ一致すると聴こえるはずである。一方、観音寺方言話者ならば、「鰻」は非下降式無核であるから「a」（HHH）か「f」（LLL）、「桜」と「鏡」は同じ下降式無核であるから「c」（HHM）が最も支持されるはずである（後述）。また、両地点とも3語は全て無核型（急激な下降を有しない音調）に属するから、有核型（急激な下降を有する音調）のb（HHL）、d（HLL）、g（LHL）は全く異なると聴こえることが予想される。注目されるのは、無核の音調同士の把握と判定である。佐藤1996で述べたように、音調の聞き分け、同定は、誰にでも可能であり、そしてそれが○×判定に現れるはずだというのが筆者の基本的考え方である。しかし、調査にはノイズがつきものであるし、「許容」の幅に個人差が存在しても不思議ではない。また、同音語が存在しない場合には、「許容」の幅が大きくなる可能性もある。佐藤1996の高年層の「許容」幅は極めて小さかったが、中学生はどうであったらうか。

	「鰻」	「桜」	「鏡」
伊吹島	LLH○	HHH○L L L○	HHM○
観音寺	HHH○L L L○	HHM○	HHM○

## 2

今回選んだ3語は、先行研究や筆者の調査によって上記のアクセント型に所属する語の代表としたものであるが、今回の被調査者について、あらかじめ全員のアクセント型が同じであることを確認した上で調査を実施したのではない。よって一部には、当該語の所属するアクセント型が異なる被調査者が含まれているかもしれない。あるいは、アクセント型の音調そのものに変化が生じている可能性もある。しかしながら、ここでは、「調査者の聴き取りによらない」という点を最

重視し、被調査者の判定の分析を中心に論を進めたい。

まず、被調査者のうち、言語形成地が当該地点とはしがたい5名（伊吹2名、観音寺3名）を除いた。それ以外については、外住経験があっても、両親が当該地点以外の出身者であっても、排除せず、その旨注記して掲げた。伊吹中学については、3年生と2年生を別々に調査したので、上段に3年生、下段に2年生をまとめた。

今回の調査結果をまとめたのが後に掲げる表である。全体としてみると、予想された以上に「○」が散らばったという印象を受ける。これはこの調査方法の限界ともいえる。しかし、無核語のみを採り上げた今回の調査において、有核型がほとんど支持されていない（有核型を支持したのは伊吹島の2名のみ）ことは、中学校の教室において全員一度に一つのテープレコーダーから出てくる音を聴いての調査であったことを思うと、中学生が皆真剣に調査に向き合ってくれた証であると考えられる。

「鰻」から見ていきたい。上で述べたように伊吹島では「e」に「○」が付き、他は皆「×」となるのが理想的な結果であるが、今回は、「c」(HHM), 「a」(HHH), 「f」(LLL) もかなり支持されている。この理由については少なくとも3つが考えられる。まず、第一は、無核の型であるから「許容」したケース。「e」と他の無核型の両方に「○」が付されているものについては、自らとはやや異なると意識しながら「許容」した場合が含まれるのではないか。第二は、「鰻」のアクセント型が上昇式無核型ではないケース。上野1995によれば、「鰻」は全調査者（最年少は昭和47年生まれ）で上昇式無核、変化なしとされているが、「e」を選ばなかった被調査者のうち、3K, 3M, 3N, 2Oは、「鰻」を下降式で、3I, 2Pは平らに（平進式で）発音する。伊吹島若年層に「鰻」のアクセントの変化（上昇式から下降式、平進式へ）を一部認めざるを得ない。第三は、他のアクセントの干渉。「親が伊吹出身者でない」中学生のほとんどが「e」を支持していない。親のアクセントの干渉によって、アクセント型の所属あるいは上昇音調に変化が生じるケースのほか、「許容」の幅が広がることも考えられる。特に、伊吹島に最も影響力の大きい観音寺アクセントでは、「鰻」等いわゆる第6類語は、句頭では高い平らのように実現する非下降式無核型であり（今回の観音寺中学生も多くが平ら調を支持）、この影響を受ければ、自らの音調が「a」・「f」に近づいたり、それらを「許容」したりすることが考えられるのである<sup>\*4</sup>。また、伊吹島アクセントの上昇式音調は、京都アクセント同様のいわゆる「遅上がり」が基本であるが、中学生においては上昇幅がやや小さい実現形が聴かれた。今回提示した「e」(LLH)は、極めて明瞭に3拍目を上げているため、かえって不自然に聴こえた生徒もいるかもしれない（この点はさらに細かく調査し報告したい）。

一方、観音寺の方は、「鰻」の音調として上昇調に「○」を付けた生徒はいない。この点で伊吹と全く異なる。上で述べたとおり、多くが平ら調を支持している。

一部の下降調支持は、「許容」した者と「鰻」が下降式無核型の者であろう（未確認）。

「桜」は伊吹では「a」のみが支持されるのが理想的であるが、今回は予想以上に「c」(HHM) 支持が大きかった。提示した音調に問題があったのであろうか。提示した「桜」の音調に問題があるならば、観音寺においても、判定が揺れるなりするはずであるが、観音寺の「桜」の結果は、アクセント型の同じ「鏡」の判定とほとんど一致しており、提示した音調に問題のないことが確認できる。とすれば、ここにも観音寺アクセントの影響を認めなければなるまい。事実、3H、3N、3P は「桜」を下降式すなわち観音寺アクセントと同じように発音する。しかし、この例をもって、伊吹島アクセントには「式」は2つしかなかったとか、伊吹島アクセントの平進式は下降式との区別があいまいであるとかいうことはできない。なぜならば、「桜」と「鏡」の回答（判定）が一致している被調査者はいるものの、「鏡」の方を「桜」より「平ら」であると判定した者はいないからである。すなわち、確かに一部には「外住経験」や親のアクセントの影響で2式のはりあい揺らぎが生じた者もあり、平進式から下降式へと所属アクセント型が変化したケースもある。しかし、今回の結果を全体としてとらえるならば、よく耳にする観音寺アクセントを「許容」する傾向の現れとまとめるのが最も穏当であろうと筆者は考える。事実、多くの中学生が読み上げ式調査において3式を区別している（と筆者は聴き取る）し、今回の回答でも、はっきりと区別して判定した中学生が13人存在しているのである（表備考2の○と△）。

「鏡」は、伊吹でも観音寺でも「c」(HHM) が圧倒的に支持されている。伊吹では、平ら音調である「f」「a」支持者は「外住・親非伊吹」にほぼ限られ（例外は2名）、平ら音調はほとんど「許容」すらされていない。この「鏡」の結果から、この語のアクセントにとって、わずかではあるが下降の存在が必須であることが知られる。また、筆者が自らの「下降式」無核音調で発音した「c」(HHM) が<sup>\*5</sup>、観音寺のみならず伊吹でも高い支持を得たということは、伊吹島アクセントの「下降式」無核音調と讃岐式西部の「下降式」無核音調とが、少なくとも3拍語においては、ほぼ一致していることが確認できたことになる。

すでに触れたように観音寺における「桜」と「鏡」の判定は当然のことながら極似している。同一のアクセント型に属する語についての判定は同一になるという、音声アンケート式調査の根幹に関わる部分が確認できたといえる。そして、2語とも下降調が圧倒的に支持されており、平ら調の支持は小さい。佐藤1996でも述べたように、平ら調は非下降式の音調だからである。ところが、「親非観音寺」の生徒に平ら調の「許容」が認められる。父が伊吹出身の場合、平ら調への「許容」「傾斜」は予想できるが、観音寺以外の讃岐式アクセントの親を持つ場合はどうか。伊吹の「鏡」においても、同様に許容幅の広がり認められる。このことは、両親の出身地における音調の実態調査やはりあい具合の分析、その地点

での音声アンケート式調査の結果をふまえなければ確かなことはいえないが、他アクセントの干渉が「許容」の幅を広げるといえるのだろうか（後述）。

### 3

外住経験や親のアクセントの影響についてももう少し見てみたい。今回の場合、当該地（三豊郡内の町は観音寺と区別しなかった）ではないとして表の備考1に注記した地点のうち、香川県中西部の仲多度郡多度津町、善通寺市、仲多度郡満濃町、丸亀市は讃岐式アクセントであり、体言の音調に観音寺市との大きな差はないと考えられる\*6。また愛媛県のうち新居浜市が微妙であるが、伊予三島市、宇摩郡土居町、徳島県三好郡三好町も類の統合から讃岐式アクセント地域であるとされている。外住もしくは両親の出身地で当該地とアクセントが大きく異なるのは、伊吹中学の場合は伊吹以外の全地点となるが、静岡市、福岡市、岡山市を除いてはみな讃岐式アクセント地域である。一方、観音寺中学の場合は、讃岐式以外は伊吹島のみである。つまり、親の出身地は大半が讃岐式か伊吹島式のアクセントである。

生徒が毎日出会う中学校の教員のアクセントはどうか。伊吹中学校を含む観音寺市は三豊郡と合わせて「三豊・観音寺」という地域を形成しており、教員の異動もその範囲で行われることが多い。そして、教員の大半は香川県出身者であり、その多くが「三豊・観音寺」地区内に居を構える先生たちである。一方、伊吹島出身者で教員になっている人は少なく、伊吹島出身者の伊吹中学校教員はここ数十年ほとんどないようである。つまり、伊吹中学と観音寺中学の先生のアクセントはほぼ似たようなものであり、そのほとんどが西部の讃岐式アクセント話者である。共通語的なチャンネルを持つ先生もあり、個人差も当然あろうが、実際の会話におけるアクセントも、やはり西部の讃岐式アクセントが一般的である。

このように伊吹島の中学生は、香川県西部（特に三豊観音寺地区）の讃岐式アクセントをよく耳にしているといえる。すでに前章で述べたことであるが、次のようになる。

	伊吹島ア		讃岐ア（三豊観音寺）
「鰻」	LLH	←	HHH, MMM
「桜」	HHH	←	HHM
「鏡」	HHM	=	HHM

伊吹中学の結果において「鏡」の判定はすっきりしているにも関わらず、「桜」「鰻」の判定には「濁り」があった。この「濁り」のうちで「許容」の差と見られる部分に関しては、西部の讃岐式アクセントの影響であることが確認できよう。

それ以外のアクセントの影響はどうか。「親非伊吹」のうち静岡、福岡、岡山出身者を親に持つ中学生は、「鰻」の音調としてHHM, HHHを支持している。こ

れらは「式」が1つの親のアクセントの影響・干渉であるとも考えられる。先に「鰻」のアクセント型の変化について触れたが、こうした生徒が変化を先導しているのかもしれない。

観音寺中学の生徒の場合、「父伊吹出身」の3人を除いては、学校生活や街で伊吹式アクセントをたびたび耳にするということはない。すなわち、他のアクセントの影響・干渉という点からみると、観音寺は伊吹島に比べて明らかに小さい。耳にするのは多く讃岐式アクセントである。ただし、讃岐式アクセント内の音調タイプの違いが影響を与えている可能性は十分に考えられる（\*6参照）。

#### 4

次に、3語に対する被調査者の反応・判定の差（の有無）を見ていきたい。備考2で「◎」としたのは、予想した通りの反応・判定（伊吹島3語を3式で区別、観音寺「鰻」と「桜、鏡」を「下降」の有無で区別）の回答であり、「○」はそれに準ずるものである。また伊吹の「讚」は、観音寺のように「桜」と「鏡」の区別がないもの、同じく「◇」は、「桜」と「鏡」については下降の有無で区別しているものである。「1」は3語とも同じ判定を下した回答である。

伊吹中学では、「◎」が8名、「○」が5名であるが、「◎」が多数を占めたとは言い難い。ただし、この調査方法では「許容」も含まれるので、実際にはもっと多くが実音調では区別している（別稿）。ここでは8名が3語を見事に3式で区別し、3式の存在を示してくれている点、また13名が「平進式」と「下降式」をはっきり区別している点に注目したい。

一方、「桜」と「鏡」の判定が一致している「讚」が4名、3語の判定がどれも同じになっている「1」も3名存在する。もちろん、回答が「讚」「1」であることが、そのまま、実音調において、2式、1式になっていることを指すのではない。しかし、「音調の聞き分け、同定は、誰にでも可能であり、それが○×判定に現れるはずだ」とする筆者の基本的立場からすると看過できない。「讚」には、すでに述べたように「讃岐式アクセント」の影響、干渉があるのだろうし、「1」には、共通語アクセント（東京アクセント）の影響も全くないとは言い切れない。今回の3語は、東京アクセントでは、「桜」と「鰻」が平板型、「鏡」が尾高型であるから、単語単独の場合、3者はほぼ同じ音調となる。「鰻」のアクセント型の変化（「桜」もしくは「鏡」に近づくこと）、さらには3語の判定に差が見られない回答が複数存在することは、一種の共通語化であるという考え方も可能なのかもしれないのである。もちろん「式」の統合ということになれば、それは、それぞれの方言において自律的に生じるものでもあり、即共通語アクセントの影響というべきではないが、核の位置が同じで「式」の異なるアクセント型を1つにまとめてしまおうとする動きは、「式」が1つである共通語アクセントが後押しする可能性を否定できない。先に挙げた、親の出身地が静岡、福岡、岡山の「鰻」の高

生徒番号	鯉(ウナギ) (6類)						桜(サクラ) (1類)						鏡(カガミ) (4類)						備考1	備考2									
	g	e	f	a	c	i	b	h	d	g	e	f	a	c	i	b	h	d			g	e	f	a	c	i	b	h	d
	L	L	L	H	H	L	H	L	L	L	H	H	L	L	L	L	L	L			L	H	H	L	L	L	L	L	L
伊3A	○																										○		
伊3B	○																										○		
伊3C	○																										○		
伊3D	○																										○		
伊3E	○																										○		
伊3F	○																										○		
伊3G	○																										○		
伊3H	○	○																									○		
伊3I	○	○																									◇		
伊3J	○	○																									1		
伊3K	○	○																									1		
伊3L※	○	○																											
伊3M※	○																										◇		
伊3N※	○																										1		
伊3O※	○																										◇=鏡		
伊3P※	○																										○		
伊2A	○																										○		
伊2B	○	△																									○		
伊2C	○																										○		
伊2D	○																										○		
伊2E	○																										○		
伊2F	○																										○		
伊2G	○																										○		
伊2H	○																										◇		
伊2I	○																										◇		
伊2J	○																										鏡=桜		
伊2K	○																										○		
伊2L	○																										○		
伊2M	○																										○		
伊2N	○																										○		
伊2O※	○																										○		
伊2P※	○																										○		
伊2Q※	○																										○		
親A	○																										○		
親B	○																										○		
親C	○																										○		
親D	○																										○		
親E	○																										○		
親F	○																										○		
親G	○																										○		
親H	○																										○		
親I	○																										○		
親J	○	△																									○		
親K	○																										○		
親L	○																										○		
親M	○																										○		
親N	○																										○		
親O	○																										○		
親P	○																										○		
親Q※	○																										○		
親R※	○																										○		
親S※	○																										○		
親T※	○																										○		
親U※	○																										○		
親V※	○																										○		
親W※	○																										○		
親X※	○																										○		
親Y※	○																										○		



起式化も、親の使用するアクセントの実態によっては、共通語アクセントの視点から見る必要があるのかもしれない。

観音寺についてもほぼ同様なことがいえる。観音寺の「◎」は11名、「○」は2名、「1」は3名である。「1」の3名は、いずれも「親非観音寺」である。振り返って伊吹においても「1」のうちの1名は「親非伊吹」であった。両地点とも、親が当該地でない場合、理想的な判定「◎」はほとんどなく、それに準ずる判定も少ない。先に、「他アクセントの干渉が「許容」の幅を広げるか」といったが、こうしてみると、他アクセントとの接触は、3語のアクセント上の区別を失わせるように働いていることになる。異なるアクセント体系の音調を耳にするとき何が起きるのか、あるいは「移住経験」のある親のアクセントに共通語化が存在しているのか、これも今後の課題としたい。

## 5

すでに述べたように、今回の調査は言語形成地を当該地点とできない生徒を除き、調査票に記入してくれた中学生全員の結果を挙げている。短くても外住経験ありの生徒や、親の出身地が他所の生徒を外して報告してもよかったが、あえて全部を示すことで、いくつかのバイアス、ノイズそのものを明らかにしてみたいと考えたのである。

振り返って調査結果を見ると、伊吹3Jの生徒は、今回の調査すべて「a」と回答しており<sup>\*7</sup>、この回答の信頼性にはやはり若干の疑問を持たざるを得ない。2Lの判定も不審ではある。しかし、そうした疑問を生み出した原因は、調査方法の側にあることを承知している。また、読み上げ調査とアンケート調査とに食い違いが見出せる場合があることも確認している。先に分析した判定・反応の傾向は、そうした回答まで含んだ全体から導いたものである（不審な回答をカットしたり、修正を求めたりすることは、この調査方法を否定することになると考えた）。

このように、被調査者にすべてを委ねてしまう音声アンケート式アクセント調査には、どうしてももやもやしたものが残ってしまう。しかしながら、読み上げ式の調査であっても、自然傍受によって収集した音声であっても、被調査者・話者の示したのものから、その背後にあるものを調査者が導き出すという点においては、実はそれほど変わらないのではないか。音声アンケート式調査の判定は、アクセント（音韻）そのものを表すものではないが、発せられた具体的音調もまたアクセント（音韻）そのものでなく、まさに実現形の1つでしかない。前者は外堀から埋めていく迫り方なのである。

単語単位の音声アンケート式調査は、単語単位の読み上げ式調査に対応するものであって、どちらも単語文としてのイントネーションの被さった特殊なケースを目指しているものでしかない、という批判があるかもしれない。しかし筆者は、

単語単位の切り出しには、ある種の「抽象」が働いていると考える。特に、単語単位の提示された音声の音調と自らの音調とが一致するか否かを判定する営みは、具体的な個々の実現形とのつきあわせというよりも、音韻レベルの「聴覚映像」との直接的な比較であるように思われる。それゆえ、実施方法には様々な困難や障害が付きまとうが、音声アンケート式調査が、アクセント調査・報告の中核を担うケースも存在するはずであると考えられる。

以上のような視点から、不備の多い今回の調査であったが、回答は全て一応は組上に載せてみた。すでに述べたように、今回の調査では、真剣に取り組んでくれた中学生のお蔭で、伊吹島アクセントの3式の存在が浮かび上がった。「濁り」はあったが、今回の調査の不備が生み出したものである。浮かび上がった3式の実態と動向について、実現形の収集、そして、時間をおいての再度の音声アンケート式調査を重ねてさらに明らかにしていきたい。今回の報告の主眼は、観察者の耳を介さずに伊吹島アクセントの3式の存在を提示することにあつたが、こうした調査方法をさらに改善し推し進めることは、そのまま伊吹島とその周辺のアクセントの動態のさらなる解明につながると考えている。

- 
- ※1 「平進式」「下降式」「上昇式」は佐藤 1996 による（上野 1989a, b 等参照）。観音寺アクセントの「下降式」「非下降式」についても佐藤 1996 参照。なお、「下降式」の始まりは「平進式」ほど高くないともとらえられるが、先行する高拍に同じ高さで後接するので、ここでは「高く」としておく。また「下降式」の下降が、自然下降による下降といかなる関係にあるのか、すなわち「自然下降に従う」でよいのか、それでは不十分なのかについては、なお慎重を期したいが、筆者としては、讃岐式（特に西部の三豊観音寺）の「下降式」と同じ程度の下降であり、「自然下降に従う」でよいのではないかと考えている。伊吹島アクセントの「平進式」と「下降式」の違いについては、前者が、高さを維持しようとする音調型であることから、「張る」「張らず」で把握することも可能かもしれない（川上 1997）。
- ※2 実は、2拍無核語である「糸（イト）」（上昇式無核）、「鳥（トリ）」（平進式無核）、「山（ヤマ）」（下降式無核）も同時に調査したが、今回は3拍語のみ報告する。提示した「山」の音調にやや問題があったことによるが、その問題点も含めていずれ2拍語の結果も報告したい。また、この調査は、読み上げ式、あるいはなぞなぞ式といった、実現形を発してもらう調査と合わせて実施しなければ完結しないこと（田中 1998）を承知しているが、今回は、観音寺中学ではそちらの調査を実施していない。伊吹中学についても、なお不十分である。
- ※3 ○とも×ともしづらい場合は△にしてよいとした。「一致」を○、「許容」を△にするよう指示したのではない。○判定にも「許容」が含まれていると考える。
- ※4 ただし、単なる観音寺アクセントの「非下降式」の音調の影響なら、平ら音調への支持にとどまるはずで、これほどの下降式（HHM）音調への支持はありえない。やはり、「鰻」自体のアクセント型の変化も認めざるを得ない。観音寺の「鰻」についても同様である（佐藤 1996 参照）。

- ※5 筆者は香川県三豊郡三野町の出身。三野町は観音寺市と丸亀市のほぼ中間に位置し、アクセントのタイプとしても観音寺アクセントと丸亀アクセントとの中間。式の具体的な音調については観音寺アクセントにはほぼ一致する。佐藤 1996 参照。
- ※6 類の統合状況については、讃岐式アクセント地域に大きな差はない（それゆえ讃岐式と称する）。ただし、いわゆる高起式音調が、全くの平ら音調を含まないかどうかについては、地域差がありそうである（佐藤 1996）。さらに、いわゆる高起式（下降式）の句頭における立ち上がり方（許容する高さ）、いわゆる低起式（非下降式）音調の上昇のタイミングと幅、なども、讃岐式アクセント内に違いがあるようだ。であるなら、同じ讃岐式アクセントであっても、地点によって「支持」「許容」が異なることになり、そのことが子に影響を及ぼす可能性もある。そのような観点から、さらに調査していきたい。
- ※7 自らのアクセントに最も近い音調が 3 語とも c となる個人が存在しても、全く不思議ではない。ただし、3 J の生徒は 2 拍語も合わせて 6 語とも「a」のみ「○」であった。

#### 【主な参考文献】

- 秋山英治 2000 「四国北部諸方言アクセントの成立過程」『国語学会 2000 年度秋季大会研究発表会発表原稿集』
- 上野善道 1985 「香川県伊吹島方言のアクセント」『日本学士院紀要』40-2
- 上野善道 1986 「日本語本土諸方言アクセントの系譜と分布（1）」『日本学士院紀要』40-3
- 上野善道 1989 a 「日本語のアクセント」『講座日本語と日本語教育 2』明治書院
- 上野善道 1989 b 「下降式アクセントの意味するもの」『東京大学言語学論集』'88
- 上野善道 1995 「伊吹島方言アクセントの年齢別変化」『東京大学言語学論集』14
- 川上 葵 1997 「高さアクセントの記述一段、向き、契機、核など」『音声研究』1-2
- 佐藤栄作 1985 「香川県伊吹島方言のアクセント体系を考える」『国語学』140
- 佐藤栄作編 1989 『アクセント史関連方言録音資料』アクセント史資料研究会
- 佐藤栄作 1995 「音声アンケート式によるアクセント調査の可能性－実現形だけでは見えないもの－」『日本方言研究会第 60 回研究発表会発表原稿集』
- 佐藤栄作 1996 「ゆるやかな下降調の聴き取りと内省について」『言語学林 1995-1996』三省堂
- 妹尾修子 1966 「香川県伊吹島のアクセント」『国語研究』22
- 田中ゆかり 1998 「社会言語学的な調査－音声アンケート式調査の検討を中心として－」『日本語学』17-9
- 徳川宗賢 1981 『日本語の世界 8 言葉・西と東』中央公論社
- 山口幸洋 1971 「伊吹島方言の 2 拍名詞のアクセントについて」『日本方言研究会第 12 回研究発表会発表原稿集』
- 和田 實 1966 「第一次アクセントの発見－伊吹島－」『国語研究』22

快く調査をご許可くださった観音寺市立伊吹中学校長行天武夫先生、観音寺中学校長大平幸男先生、ご協力たまわった伊吹中学の合田久美先生、林秀昭先生、関茂樹教頭先生、観音寺中学の田井安紀子先生、そして何より真剣に回答してくれた伊吹中学、観音寺中学の生徒の皆さんに心より御礼申し上げます。